

\*\*\*\*\*

一部50円です

\*\*\*\*\*



## 鷹と雀

数年前からベランダに住みつくようになったスズメがいる。この2,3年春と秋に仲良く子育てを繰り返している。スズメは働きものだ。常にキョロキョロと警戒心を怠らず、餌場の田と巣を夫婦で交代しながら飛び回る姿は真剣そのものだ。

昔、兄は鳥を大きな小屋で飼っていた。すぐに死ぬものもあれば、しばらく生きているものもある。カラスなどは強かったが、それでも一年ほどしか生きていなかった。ある時、カラスが死ぬと兄は次の鳥をタカに決めた。鍛冶屋に頼んで木の電柱に足裏でけり込む金具を用意してきた。私は、鷹がこわくて巣に近づくだけで親鳥が飛んで来てかみつくと感じていたから、巣に登って雛をつかまえたくなかった。怖がる私の思いなど無視されて、タカの巣を

見つけるために山に登る兄につきあわされた。巣らしきものを見つけると木に登って雛鳥をさがすのだ。タカは強い鳥だから、その巣も立派かと想像したが枯枝を木の又に積み重ねただけで屋根や風よけになるようなものもない。じつに簡単につくりで開けっぴろげの巣であった。

幾つもの巣をさがしても雛は見つけられなかったが、あきらめ切れない兄は村の猟師に頼んで雛を手に入れた。さあ大変だ、タカに与える餌を毎日探さねばならない。生きたドジョウ、カエル、タニシなどを朝と晩、小屋の下の水場に生きたまま放った。タカは猛禽類なので餌さがしには苦勞した。ドブカエルはダメで青ガエル、イモリは食わないなど大変難しいデリケートな鳥であった。

しかし、夏の暑い日に、突然タカは死んだ。飼っていたのは、一年ぐらいの短い期間であった。タカが死んで鳥小屋は空っぽになった。兄が鳥を飼うのをやめたのだ。タカを自分の支配下にしようとした事の愚かさに気づいたのか、そういう事に怖れたのか。兄は鳥を飼う事をやめてしまった。

ベランダのスズメを見ながら、ふと我が身を鳥にたとえれば何になるのだろうかと考えた。眼光鋭く世の中を見続ける力もないからタカにはなれない。スズメほどの働き者でもない…。タカにもスズメにもなれない。いくつになっても、ゆるる自分の心があさましい。



懇親会の前日に電話した、恩師まつおはんと立木君は快く参加してくれた。先生は、始めに、「いつも芥川だよりを送ってくれるが、どう読めばいいのかわか、取つきにくいものだ」と切り出した。参加者からも、編集方針についていろいろと意見が出て盛り上がった。

先生は静かに酒を飲んでおられたが司会者に指名されて、「下村君は色々雑多な文章を読んで自分のものにする人物のように思える」。立木君は、「彼とは小学から高校まで一緒でした。皆さん、彼の長話に付き合ってもらいありがたいです。芥川だよりに、死について一年間書いた事がありますが、もう忘れませんでした。自分も今年61歳になります。確実に死に近づいています。振り返って見ても、たいした目標を持って生きてきたわけではありません。ひとから見ればどうでもいいような事です。今この歳になつて、生き甲斐は一見むだに見える事をする中で感じるのではないかと、考えるようになりしました。芥川だよりも一見無意味なものに見えるからこそ生き甲斐を生む素地があります。生き甲斐は如何にムダな事に熱くなるかと考えています。」ふたりの言葉を聞きながら、上手に言うなあ、と感心した。楽しい場と美味い肴をあてに飲む酒が言わたのだろうか。

姉が怒っている。笑っていても、どこ

か怖い私の姉チャンが怒っている。政府に。自分たちがもらう年金の少なさに。

せっかちな姉は、義兄が60歳から年金を受け取ることを選択した。「65歳で、それまでにキヨズミが死ぬかもしれないのにと」と、「肺ガンの主人によくそ

んなこと言うよな」と思うことを、とても単刀直入に言って、手続きをした。そしたら、年間150万円が義兄の年金であると判明した。

「私、電卓で12で割ってみました。出た！姉チャンの丁寧語。無茶苦茶怒っている、ということだ。それに、姉は暗算は得意だ。わざわざ電卓を叩いた、というのは、「よもや間違っってはならぬ」という気持ちと、嫌がらせにはかならない。何に対する嫌がらせかはわからないが。ともあれ、12で割ると12万5千円。

「これで、夫婦二人、生活していけないことかいな？この倍あっても、足りませんでな」。そりゃ、そうだろう。とくに、食餌療法をしている今、食費だけでも大変だ。

姉が怒っているのは、「うちは、ものすごくたくさん、年金やら何やら社会保険料を払ってきてんねん。しやのにお母さんより年金少ないって、どうい

ことやねんな！」。姉によると、義兄が病気になるまで、毎月の社会保険料は15万とか16万とかいう金額だったのだそう

だ。「それが病気で、毎月9万2千円引かれるようになってん」。もちろん、全額が厚生年金ではなく、介護保険料や健康保険料などを含めての話だが、「そんだけ払ってきて、いざもらう段になって、何でこんなに少ないのん？」。

厚生年金は、企業が同額を負担する。だとしたら、国はかなりの詐欺を働いているということになる。私の姉チャンでなくても怒るはずだ。その上！無職となったこ

れからも、義兄は毎月6万ほどの社会保険料を払っていくのだそうだ。ウソでしょ、姉チャン、何かの間違いでしょ、と言ったことあるか？(ウソ自体は、子供のころからの分も含めれば何百回もつかれたことがあるとは思うけど)。介護保険料とか国民健康保険料とかは払わなあかんねん

テ。「私が何で貸金庫にお金を入れてるかかっていうとな、銀行に預けてたら運用されるやろ。それって、一部は政府にいくやんか、1円たりとも使わせたるもんか、と思つて

サ」さすが、私の姉チャンである。確か、銀行の貸金庫にお金を入れたのは、高額な先端

医療費をサツと出せるようにしておいて、義兄の治療のチャンス逃がさないようにするためだ、と言っていたが、あれから2年。貸金庫の活用の意味が変わ

っていたらしい。そうか、日本政府を相手に、そんな不毛な戦いを挑んでいたのか。知らなかったよ、姉チャン。それによって、日本国がどれだけの痛手を被ったかは定かでないが：

ともあれ、今月から姉夫婦は1か月6万5千円の年金生活に突入した。「エンゲル係数もへちまもないわな」と言い放ち、

「これからは、一切、始末しない。いままでは、有機野菜や厳選食材は高いから、なるべくキヨズミに食べさせて、私はライフ(近所のスーパー)でテキストに買ったもんを食べたりしてたけど、これからは、キヨズミと同じモノを食べることにする」。

ヤケクソ、というやつだろうか。しかし、姉は100%本気だ。何でわかるかって？だって、姉はこんなことを言うてるからだ。

「いままで、ちよつとしか入ってなくて1袋500円のレーズンをキヨズミに食べさせ、私はどっさり入って298円のヤツを食べてたけど、これからは、私も500円のを食べますワ」。

という流れになると思うが、私の姉チャンはそもそもフツウの人ではない。「だって、チマチマしても、もうしょうがないやろ。それに年金生活になったからって、チマチマするのはイヤやしな」。

そりゃ、誰でもイヤだけど。エンゲル係数200%(これは、極貧を超えて、ありえない数値だが、ま、感覚としたらそんな感じ)でかめへんねん。今まで通り、使いたいだけ、使った

。そういう姉の心意気やよし！、と実は私は思っている。お金は、計算すると「とてもやっつけていけない」

というふうになってしまいが、実際は何とかなって、庶民はどっこい、元気に生きている。一方でそんな宣言をし、一方で銀行に自分のお金を預けず、国に懲罰を与えようとしている姉だが、別の一方ではこんなことも言っている。

「私が一番、イヤなんは平気で国のお金を使おうとする人らやねん。働けるのに、働かんと生活保護もらってるYちゃん、友だちやけど、その生き方、ああ、

間違ってるなあと思う。近所の奥さん、すごい大きい家に住んで、お金も十分あるのに、年取って、足が悪くなって、でもほかはぴんぴんしてるのに、福祉に頼



## 米国時代 3 (1978年12月〜1984年1月)

土田 裕

## 「自転車商内」

ってはんねん。  
『デイセンターで、お風呂に入れてくれるから、家では1回も風呂を沸かしたことはありませんねん、ケケケ』って。  
『ちよっと待って下さいや。その水道・光熱費、センターの人の人件費、みんな税金ですわねん。風呂ぐらい、自分ちのに入りなはれ』とよっぽど言うたるかと思うねんけどな』  
まあ、その年齢、そのシチュエーションになってみると、わからないことがあつて、私なんか

「ああ、よかった！今日は、センターでお風呂に入れてもらえたし、シャンプーもしてきたから、200円は浮いたな、ケケケ」

とほくそ笑む日がくるかもしれないので、あまり、エラそうなことは言えないが、それでも姉の言い分に賛成だ。自分のお金がある人はなるべく、自分のカネを使ってほしい。福祉のお金は無尽蔵にあるわけではなく、全部、貴重な税金で賄われているのだから。

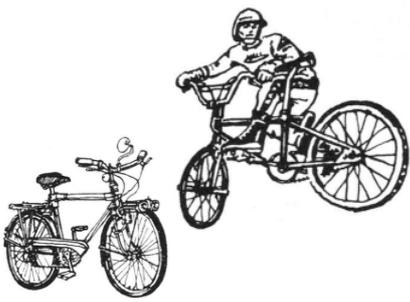
しかし、姉は政府に対して、もつと辛辣で、もつと過激なことを言っている。それは来月号に書くので、野田総理、「芥川だより」次号、50円、必ず買って読むように。言つとくけど、自腹でなかったら、姉チャンが頭から火を吹くゾ。もう、とつくに嘖いてますけどね。(A O)

三井物産では商売のことを商内という。呉服の越後屋から始まった会社なので「商い」を商内と表現したのと思う。

ところで当時の大阪支店物資部の主たる輸出商品は自転車およびその部品であった。昔から自転車部品のメーカーは堺に集中しており、中でもシマノは当時から世界的に有名で輸出も自社で現地販売会社を通じて行っていた。シマノ以外の中小メーカーは商社を通じて輸出していたが、大半が専門商社であつて、総合商社で自転車を扱っていたのは三井物産だけであつた。私はその大阪支店物資部からシカゴ支店に転勤したので、自転車については相当の精力を使った。当時、自転車は完成車をニューヨーク本店でも扱っており、ポルティモアに販売会社を設立、東海岸中心に売っていた。一方、シカゴ店はタカラ・グループなる代理店八社からなる販売網を組織し、それぞれの代理店が自分の販売地域の州をカバーする方式をとっていた。北はバッファローから南はワイキ

キまで全米をカバーしていると言え、格好はいいのだが、実際には家族経営の零細企業の集まりで、八社合わせて年間二万台くらいの売り上げであつた。米国転勤するまでは自動車大国の米国では自転車の市場はそれほど大きくないのではと想像していたが、実際には自動車の販売台数(当時は約九百万台)とほぼ同じ台数の自転車が売れていることを聞いて驚いた。但し日本では八十%がいわゆるママチャリと称する安い物用や通勤用であつたが、米国ではほぼ九十%がレジャー・スポーツ用の軽快車とモトクロス車であつた。

米国にも自転車メーカーは数社あつたが、安物だけを国産しており、中級以上はすべて輸入品であつた。シカゴにあるシュイン バイシクル社は米国随一の高級車メーカーとして有名であつた。それでも売れ筋の軽快車はほとんど輸入品で当初は日本製を輸入していたが、円高で日本製の競争力がなくなり、台湾



製に切り替えつつあつた。当社はシマノ以外の自転車部品をシュインに納入していたが、高級自転車の場合、米国の顧客は完成車のブランドで買うわけではなく、どの部品を使っているかで買う傾向があり、シマノが圧倒的に強かつた。それでもシュインに売り込んで欲しいというシマノ以外の日本の部品メーカーに同伴して、何回も社に通つた。年に一度、コンベンション(新作発表会)が行われ、70年代は景気が良かったのでハワイで開かれていたようだが、私が着任した頃から米国メーカーの売れ行きが悪くなり(自動車も同様であつたが)経費節減のため、シカゴ郊外のリゾートホテルで開かれていた。シュインは伝統的なファミリー企業で社長のエドワードは確か三代目だつたと思うが、遊び人で社業はアル・フリッツという番頭さんに任せていた。一〇数年後、日本でもシマノ以外のファミリー企業は殆ど潰れるか、吸収合併されたが、シュインも、私が帰国後、一九九三年、ある投資グループに買収されてしまった。シュインだけでは商量二百万ドルくらいにしかならないので、ミルウォーキーにあるトレック バイシクルというベンチュアビジネスに丸抱えで全ての部品を納める商内を始めた。トレックは設立後三年ほどで米国でも著名な高

## あの世の話 とある読書感想文(1)

大江雉兎

先行きの不透明さがオカルト的なものを呼ぶのか、あるいはそうしたものに惹かれるのが人の性なのかはわからない。確実に言えるのは、その手のものは、手を変え品を替え、いつの時代でも流行っているということだ。オカルトが否定的に響くのであればスピリチュアルと改める、そうしたところまで含めると、手を変え品を替え、名前も換えてといつていいだろう。

『生きがいの創造―生まれ変わりの科学』が人生を変える』という本がある。内容を考慮したうえで、これをその一群に加えるかどうかには議論もある。だが扱われている話題をみれば、その系統である。そんな『生きがいの創造』だが、知人より奨められて読んでみた。そして最初に抱いた感想は、危険な本だなということだった。

本題にはいる前、書誌的なバックボーンを紹介しておこう。筆者の飯田史彦氏は現在の肩書きは「いのち作家、音楽療法家、カウンセラー、コンサルタント、経営心理学者」(飯田氏のホームページより)となっているが、二〇〇九年までは福島大学経済経営学類で教鞭をとっていた方である。教官時代は「組織文化」が研究テーマだったこと

が『生きがいの創造』に記されている。そして組織構成員の作業意欲を向上させるノウハウを論じる過程で、たまたま死後の世界や生まれ変わりの話題に触れた時、予想外に大きな反響が得られたという。飯田氏が紹介したのは、

精神療法の最先進国アメリカではその種の話題が科学的議論の対象となつていくことだったのだが、反応の大きさから、自身の専門分野である「生きがい論」に結びつくのではないかと考えた、ということである。飯田氏の言葉を書き抜くと「その情報(死後の世界や生まれ変わりの話題)を、ただ聞き手の先入観をなくしながら正しく伝えるだけで、人々は、職場での働きがいの意味をはるかに超えた、人生全体の『生きがい』や『幸せ』の意味について、根本的に問い直しはじめるのです」とあるところである。

これが契機となつて一九九五年に福島大学の学術誌「商学論集」に『生きがい』の夜明けく生まれ変わりに関する科学的研究の発展が人生観に与える影響について」を発表、そして翌年、論文をもとにハードカバー版の『生きがいの創造』をPHP研究所より刊行する。さらに『同(決定版)』『同Ⅱ』などを立て続けに発表するとともに、一連の著作の発端となった『生きがいの創造』の文庫化を通じて、経営学の

研究者というところ以外での評判を獲得する。二〇〇九年には福島大学の教授職を辞して「飯田史彦スピリチュアル・ケア研究所(光の学校)」を設立して現在に至っている。

以上のような情報を踏まえ、『生きがいの創造』の内容を覗いてみる。主要な話題は、死後の世界や生まれ変わりで、だが、そうした話題に対して、真偽の議論を積極的には行わないのが本書の特徴の一つと言つていい。生まれ変わりの仮説を肯定する事例や見解をたくさん引用することが主張に他ならないと見なすこともできるが、飯田氏が繰り返し書いているように、この本はそうした話題に関する「科学的研究の成果を、わかりやすく整理して、ご紹介」するためのものなのである。

実は、この本を読み進めているうちに、分かりづらさを感じてページを戻ることが少なくなかったのだが、それはこうしたスタイルによるものなのだろう。飯田氏の見解が明確にならないまま、強烈なインパクトのある症例報告や飯田氏以外のさまざまな意見が並べられることによって、行く先が見えづらくなってしまふのである。症例の報告者は錚々たる肩書きのある研究者たちである。この本に対しては、肩書きを振りかざして読者を煙に巻いているとの難癖が付けられることもあるが、そんな批判が出るのも、このスタイルに起因するものだろう。

ただしこれについては、最初のところでことわりがはいっている。「本書では、いわゆる霊能力者や宗教家、民間のセラピスト（治療家）やジャーナリスト（報道関係者や評論家）、あるいは文化人や芸能人と呼ばれる方々がお書きになったものは、大きな理由がないかぎり、なるべく取り上げないことにしています。もちろん、それら多数の著作の中にも、優れたものがいくつもあることは否定しませんが、できるだけ学術的かつ客観的な立場を守るために、名の通った大学の教官、博士号を持つ研究者や臨床医の研究を中心に引用しています」とあるところである。

これは好意的に取れば良心的姿勢といえるだろうし、ある意味での信仰表明でもある。しかし悪し様に解釈すればドグマ的発想、すなわち権威を無批判に受け入れる教条主義的思考を助長する。引用を積み重ねて議論を進めるのであれば、症例報告であれ、見解であれ、それぞれのバックボーンを示したうえで依拠する根拠を明示することが求められる。かくかくの理由でこのレポートは傾聴に値する云々といった具合で、飯田氏自らの判断が必要になる。そのことは、この本が随所で強調する「科学的」「学術的」態度でもある。この本を通読した際に感じた危険な香りは、「科学的知識」や「学術的研究」

といった言葉遣いが多用されているにもかかわらず、全体的にそうした組み立てが感じられないところによっているようだ。紹介されている症例報告は、精神医療の専門家が行ったカウンセリングで導かれたもので、信を置くに値する。しかし科学者が提供する話題を扱うことと、話題を科学的に扱うこととは、言い回しは似ていても中身は違う。この本は死後の世界や生まれ変わりの話題を科学的に取り扱うものは、けつしてない。

さらに困ったことに、この本が紹介する症例は、どれもこれも強烈な印象を残す話ばかりである。そうした症例がたくさん挙がっているため、誤解も生みやすい。飯田氏自身も、このことには気づいているようだ。というのは「本書が『有意義な人生を送るための発想法』を説く書であることを正しくご理解くださらず、私を『死後の生命』や『精神世界』そのものについての研究者だと誤解なさる方々から、目的の異なる大歓迎を受けて困惑すること、少なくありませんでした。これは、もちろん、私自身の筆力の乏しさが招いた失態であり、私は大いに反省いたしました」とも書かれているからである。弁解のいくらかは社交辞令だとしても、構成上の問題点は「目的の異なる大歓迎」を招く可能性をもっている

と言わねばならない。他にも、重箱の隅をつついて揚げ足を取ることのできるが、建設的ではあるまい。実のある議論をするのなら、飯田氏の専門分野での発言を見る必要がある。死後の世界や生まれ変わりの思想を受け入れることが、人生を送るうえでどのように影響するか、ということについてである。本書では、宗教的信仰心から生まれ変わりを信じることを引きあいに出しておき、科学的に生まれ変わりを認めることと宗教的に信じることは「結果として同じ効果」をもたらすと主張する。「効果」という言葉が出てくるあたりがマネージメント論の本領だろうが、その原因としては自分自身に対する「問題意識が明確になり、自問することができ」からだとする。さらに、そうした問題意識を持つことは死後の生命等々を認めなければできない話ではないと強調したうえで、それでもなにかの原因できっかけを見失っている人には、永遠の魂に関する科学的議論の知識は「生きがいの源泉」となると説く。

乱暴かつ強引ながら、こういう形に要約すれば、大勢において受け入れられるに違いない。死後の生命は認めなくても、自己に対する問題意識をもった有意義な人生は可能というところまで譲歩している点を捉えて、それでは前

提が失われて議論も成立しないというのであれば、その点もまた論法の欠陥とし指摘されねばならない。しかし、タイトルである「生きがいの創造」が窮極の目的であり、輪廻転生をめぐる科学的議論は「生きがいの創造」につながる、そのことが本旨だというのなら、そんな結論の部分は一考に値する。

論理的な飛躍や操作上の問題が多く、右に述べたようなところに本書の重心を見出すのは容易でないのは事実である。それでも『生きがいの創造』と接して気持ちが軽くなったとか、救われたとかの感想が多く寄せられているのも事実のようだ。永遠の魂を実在として認めるのと同じように、本書に対するそうした好意的な反応に耳を傾けるのなら、結論に到るまでにある数々の欠陥には、あるいは目を瞑ってもいいのかも知れない。（続）

### 俳句

「インドネシアを旅して」大林幸枝

村人のケチャックダンスや二月旅  
春の海見下るす断崖インド洋  
のどかさやジャワの遺跡に時流る

藁女

淡き湯に老斑増えし顔を見る  
寒の餅きな粉しようゆにおろし餅  
庭の柚子完全無菓ジャム作る  
原子炉と里はかたきか春がすみ  
バイパスの手術成功春浅し

## 食物アレルギーの物語 I

アレルギーの本当の医学、臨床環境医学（アメリカ環境医学）を知ってもらうためには食物アレルギー学の歴史などを語らなくてはなりません。

食物アレルギーとは普段食べる食物によつて起こる病気です。故に古くから言い伝えや文献によつて書き残されています。

古代ギリシャの医聖ヒポクラテスは、チーズで具合が悪くなる人のことをあらわしています。また、同じ時代の詩人ルクセチウスは、食物アレルギーを端的に表わす言葉として「食べ物は何によつては毒となる」と書き残しています。ピポクラテスは、てんかんが飢饉のときに消える人があること、聖書ではてんかんには断食をすべきだと記されています。東洋でも同じような観察があり、「医食同源」と言う言葉は皆様も聞かれたことがあると思います。病と食べ物には密接なつながりがある、と古今東西を問わず気付かれていたのです。

全世界の宗教を修養と言う観点からみれば、食事は重要な意味を持っています。仏陀は菩提樹の下で悟りを得るその直前40日間断食をしていましたし、キリストが神の啓示を受けたと言う場面では彼は水も食べ物もなく荒野を7日間彷徨つ

ていた

と聖書には記されています。

アレルギー反応の映像を紹介したアメリカのドリス・ラップ医師はアレルギーの子供には本来頭の良い子供が多いこと、そして治療が成功すると素晴らしい知能を發揮する子供がいることを述べています。その実例がネットやビデオで紹介されている小児鬱病と誤診されていた少女マシューでしょう。彼女の治療前の知能指数はたったの57、治療後は127に跳ね上がりました。脳のアレルギーから人が解放されるとその人本来の脳の活動「知性」がバーストするのです。

悟りを得る前には神経症状にも苦しんでいた仏陀、その悟りが断食によつて食物アレルギーから解放されたときに起きた脳の正常化ではないかと僕は常々考えているのですが、皆さんはどう思われるでしょうか。

ともあれ、食物アレルギーを認識した文献は古くから散見されてきました。1904年オーストリアの小児科医フォン・ピルケによつてアレルギーと言う造語が作られ定義されたとき、今一般に知られているアレルギーの考え方よりはより広い範囲



断食苦行中のブッダ

が意識されていました。

1920年代アメリカ食物アレルギー学の父故アルバート・ロウ博士は除去食を考案し患者に原因食物の除去と負荷試験を行うようになりました。その過程で慢性疲労や頭痛、精神症状、不定愁訴など様々な症状が患者に再現されたのです。それらは体系付けられて「アレルギー性毒血症と疲労 (Allergic toxemia And Fatigue)」として発表されました。

しかしながら1929年ロウ氏がアレルギー学会の議長であった年に、その広範囲に及ぶアレルギーの定義について学会で大きな論争が起きました。議長でありながらロウ氏の食物アレルギー学派は少数であったために、根拠の無いものとして以後否定排斥される憂き目に遭います。

食物アレルギー学を、レアニンとして仮説が立てられていた（後にI g E抗体として発見される）抗原抗体反応によつてのみ捉え、食物負荷試験によつて患者に再現される精神症状などを患者や担当の医師の思い込みと切り捨ててしまったのです。

アーサー・コーカ博士は学会のその風潮に異を唱えましたが、容れられませんでした。アレルギーでも即時型とされ、I g E抗体で引き起こされる湿疹、蕁麻疹、枯草熱、鼻炎、

喘息のみが対象とされ、食物アレルギーに多い遅延型は外されてしまったのです。様々な症状を示し、負荷試験以外に科学的な検査方法もなかった食物アレルギーは何時しか主流派の医学から忘れられてしまいました。でも前出の二名に加えてもアレルギーを持つハバート・リンケル医師、セロン・G・ランドルフ医師らによつて研究は続けられました。

アーサー・コーカ博士はアレルギーがスクラッチ法、皮内法では精度として20%位の判定率であることを見いだしました (I g E REASTでも50%でしか

そしてハバート・リンケル博士は、そしてハバート・リンケル博士はアレルギーにいくつかの型があることを発見しました。

第一、たまに食べたのでは反応しないが、続けて食べていると具合が悪くなる

第二、依存型のアレルギー。この型の人は、いつも食べる食事に自分がアレルギーになっている食物を含めているが、これを取り損なうとアレルギー性―依存性禁断症状が現れてくる。それを防ぐため好んで食べ続けることになる。このような麻薬のような働きをする食物アレルギーがあるのです。

第三、食物に対して固定した反応を示す型です。すなわち、ある物を食べれば

ごく少量であれ反応する。(これが一般的なアレルギーです)

またリンケル医師は長年医師を困惑させたアレルギーの一面を発見している。多くの人たちが、意識的にしる偶然にしる自分がアレルギーになっている食物を4〜5日間食べていないと急性の過敏期に入ることである。これらを加味してリンケルは回転変換食を考案しました。

1950年代初期、シカゴの元ノースウエスタン大学医学部講師故セロン・G・ランドルフ博士はノーラ・バーンズという心気症と診断されていた元化粧品販売員で医師の妻だった女性の四年間にも渡る精緻な診察からロウ氏の考えを發展させ、彼女の症状を化学物質過敏症(最初は石油不耐性症)と名付けました。彼は研究を進め、E C U (Environmental Control Unit) 疑わしい環境物質や化学物質を極力除去したクリーンルーム)による疑わしい物質のほぼ完全な除去によって食物だけでなく化学物質やカビ、埃などの環境物質によっても食物アレルギーと同じような症状が起きることを実証し、クリニカル・エコロジー(日本名:臨床生態学)として発表しました。それは、既知の症状の他に精神疾患、リウマチ、頭痛、皮膚炎、更年期障害、不定愁訴、慢性疲労等の原因不明とされてきたさまざまな慢性疾患に治療の光を当てる画期的な

ことでした。そして現在の化学物質文明を健全に發展させるための必要不可欠な安全な方向性を示すのだったのです。しかし彼ら5名に賞賛は与えられず、待っていたのは実におぞましい苦難の道でした。

1930年代からの論争は決着することなく続き、食物アレルギー学派は完全に無視されるようになりました。

1940年代後半、ランドルフは多数の論文を書き、医学雑誌に発表しました。そして1949年ワシントンでの食品医薬品局の行う食パンについての公聴会で食品成分のラベル表示(いまでは当然のことですよね)を主張したところ、彼の主張を否定するために呼ばれていた数人のアレルギー専門家によって否認されました。そしてまもなく彼の著作に大学と提携していることを記載することは禁止され、大学講師の職を解かれました。それは石油企業や食品産業(あるいは精神医学会、心療内科学会ともいわれている)からの圧力であったとも伝えられています。彼は言っています、「病気の原

因はカビだ、ほこりだといっている限りは、どこからも抗議は受けなかった。しかし食物や化学物質が原因だと言いだしたら、食品業、石油化学工業、製薬会社などからの攻撃が始まった」。

(この項つづく)

### リハビリ3

左肩のリハビリを受けてひと月が経った。なかなか快方に向かわない。

「ケンバンソンショウカもしれませんね」

女性のリハビリ師がそう言った。

「レントゲンでは映らないんですよ。」

「MRIで検査しないと」

私の疑問に答えるようにリハビリ師は続けた。

『ケンバンソンショウ?』『MRI?』

早速、調べてみた。

ケンバンソンショウとは『肩腱板損傷』のことだった。肩腱板とは肩の筋肉と上腕骨を繋ぐ板状の腱のこと。腱とは膠原繊維(ゼラチン)が集まって出来た白っぽい強靱な組織。『アキレス腱』が広く知られている。

次いでMRI(マジック・レザナンス・イメージングシステム)とは磁気共鳴画像装置のこと。磁場に電波を流して人体の水素原子核を共鳴させ患部を写し出す。水

平面面しか写らないレントゲンやCTと違って縦・横の輪切り画像が写るのが特長である。

『検査を受けて見よう。もし腱が切れていればリハビリは意味がないのではな

いか』  
それから一週間後にMRI検査を受けた。

トンネル状の磁石に入り、左肩に三角布を当て耳栓をして横たわった。耳栓をするのは太鼓のような音が小一時間も鳴り響くからである。この音に耐えるのは苦痛だった。

検査結果は四、五日で出た。俗に言う『五十肩』だった。正式には『肩関節周囲炎』と言う。打撲で誘発された。

治療法は週一回の注射(ヒアルロン酸と痛み止めを混合したもの)と週三回のリハビリ。私の場合はリハビリ開始が遅れたので治すのに九カ月ほど掛かる。それでも駄目なら肩関節を包む『関節包』や関節の動きを良くする袋『肩峰下滑液包』の治療をする。場合によっては内視鏡手術もあるとのことだった。

酔って転んで五十肩まで誘発すると

は我ながら情けない。

しかし、物は考えようだ。この程度で済んで良かった。打ち所が悪かったら片端になるか死んでいたかも知れない。

MRI検査を受けて、その思いを強くした。

MRI画像は骨と肉しか写らないレントゲンとは大違いだ。軟骨、筋肉、筋、靭帯、腱、腱板も写る。それを目にする

と人体の精密さに畏敬せざるを得ない。

自分でわかること、できること

ストレスが心の凝りであることを  
思えば、まんざら意味の通らないこ  
とでもない。

心の凝りは、肩のようにもんでほ  
ぐれないのがつらい。ウンウン、わ  
かる。その気持ち、と言って聞いて  
くれるけれど、期待した答えはかえ  
ってこない。こうすれば、このよう  
に心を切り替えたらとまでも言って  
くれる。でも、自分がとり上げてま  
ではいけない。じつくり聞く、そし  
て暗いトンネルの中に一つの光が入  
ってくることを望んで歩いてゆくべ  
しという。

口が一つで、耳が二つというのが、  
しゃべるよりは二倍の話を聞くこと  
だろうと思う。

自分にとって都合の悪い時や、  
忘れてしまいたい時、どうしようも  
ない時、男は酒を飲む。

飲んで、飲まれて飲みつぶされて  
眠るまで飲む。

女はそんな時、歯を喰いしばって  
泣く。泣いて 心をかきむしる。そ  
して嘔む。

忘れようとする、こんな生き方を  
していても、女性のほうが長生き、  
百歳以上八割が女性とは、これ如何  
に…。

ふたりの自分

長年一緒に年をとってきた夫婦、特有  
の味のある後姿、一瞬羨ましいなあとい  
う思いが走った。あわてて揉消す、私の  
心の弱さ。

むかしむかしあるところに…で始ま  
るじいさん、ばあさん。あの年だったら  
見合い結婚の可能性が高い。現代あらし  
て仲良く年をとっていく夫婦がまだま  
だたくさん残っている。

打合せ通り見合いをして、お茶一口飲  
んでOK。それで結婚式。

これは江戸時代の話でもなく、明治の  
話でもない。昭和の話である。現代はそ  
のような結婚では、日本人もなぜ、満足  
がいかなかったのだろうか。

明治、大正、昭和と日本に入ってきた  
西洋の恋愛小説である。男も女も、この  
ような小説を読むようになり、身の程知  
らずになり、親、近所の人のすすめた結  
婚相手では満足せず、小説にでてくるよ  
うな相手を求め、現実の生活にも満足せ  
ず不満不足、ブツブツ言いながら、同居  
離婚の生活に平然としている。

小説とは異なり、現実には罪作りなもの  
である。浮き浮きするような官能な話  
はないものだろうか。どんよりした気分を  
変える為に、あの一着を買ってみよう  
か。

「似合わないよと言う人なし、今わたし

が言う」自己表現する力、これは自分  
を、もうひとりの自分が見つめられる  
から出来ると思う。

もう一度八十歳初年

古い話になるけれど、作詞家星野哲  
郎さん。歌詞すべてが好きだった。

水前寺清子さんが歌う「三百六十五  
歩のマーチ」。

幸せは歩いて来ない  
だから歩いて行くんだね  
……………

幸せってそういうものなんだ、と感  
じたのを覚えている。

自分が今不幸だと思ったときが、心  
の迷いを生じたとき。

若い頃は何もおそれずにつき進む  
が、年老いてゆくと共に、いろいろな  
ものを失ってゆく。失ってから大切さ  
に気づく。

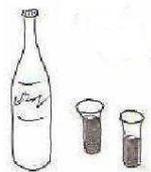
もう一度目指す八十歳初年を、おそ  
いか、**“がんばれ”**人と人との交わす  
会釈は、人生の「二期一会」これから  
も大切にしたい。

編集後記

先日の懇親会は楽しい会になった。  
真糶さんが持参された酒徳利と盃でも  
つて、明石さんがくれた銘酒を燗をし  
て、皆さんの手料理をあてに飲む酒の  
味は最高であった。

やはり老練なる思考を持つ人は、嗜  
好も深いのだ。司会役をお願いした龍  
さんが中入を入れながら最後まで会を  
盛り上げて頂きました。流れを読み適  
者に話題をふる術は、皆さんに満足し  
て頂けたと思います。私の長話を除け  
ばですが。

こんな楽しい会を味わうと、人との  
交わりの奥深さを改めて感じます。創  
刊号に書いた「世の中で一番おもしろ  
いのは人である」という文句は今も健  
在であった。来年も開けるように芥川  
だよりを続けていきたい。



『お知らせ』

北の国に魅せられて  
宮北昭子  
油彩画展

3月15日(木)～  
20日(火)  
10時から17時

茨木市立ギャラリー  
TEL 072 - 621 - 1850

親しいお客さまなのでご案  
内させていただきます

着物から服を仕立てます

梵~ぼん~